MYP Unit Planner　-MYP 単元計画-

担当教師	山部 智可	教科	Arts (音楽)		
単元名	音色による感情表現	MYP の年次	MYP3(中２)	授業時数 (時間)	9

Inquiry 探究: 単元の目的を確立する

重要概念	関連概念	グローバルな文脈
コミュニケーション	受け手・解釈	個人的表現と文化的表現：分析と議論

探究テーマ

感情の表現方法の分析と解釈の議論を通して、受け手との効果的なコミュニケーションを生みだす可能性がある。

分析：表現者側　　解釈：受け手側

探究の問い

事実的―コミュニケーションとは何か。

コミュニケーションとしての音(音楽)を形作る要素は何か。

概念的―感情が伴った音色には、どのようなコミュニケーションとしての表現があるのか。

議論的―感情を，音を通して表現することで，どの程度受け手とコミュニケーションを図ることができるのか。

音の分析を通して，どの程度受け手がその感情を解釈することができるのか。

目標	総括的評価	
CriterionA:調査 Ａii　選択したムーブメントやジャンルの芸術作品または、パフォーマンスについて詳しく述べる。 CriterionB:発展 Ｂｉ　実践的にアイディアを探究し、芸術作品やパフォーマンスの完成に向けた取り組みに活かす。 Ｂii　最終的な芸術作品やパフォーマンスについて、芸術的意図を探究テーマに沿って明確に提示する。 CriterionD:評価 Ｄii　芸術家としての自分の成長を振り返る。	評価規準を含む総括的評価課題の概要 GRASPS (G)Gool　目的 感情の表現方法の分析と解釈の議論を通して、受け手との効果的なコミュニケーションを生み出すことができるようにする。 (R)Role　役割 クリエータ (A)Audience　対象 同じ言語を使わない同年齢の人 (S) Situation　状況 言葉が全く通じない、伝わりにくい状況 (P)Product　成果物 感情を表現する音色 (S) Standard　評価基準 ・レポート(Ａii、Ｂｉ、Ｂii、Ｄii) ［レポートに記載する具体的な内容］ 自身が生み出した音について分析し、音の三要素に基づき詳しく述べる。(Ａii)音色による感情表現を分析し、議論を重ね、根拠を持って音を創作したうえで、自身の作品を振り返り、制作過程における変遷 (Ｂｉ)・自身の作品の芸術的意図と音楽の要素の特徴 (Ｂii)・音とコミュニケーションについての自身の考え(Ｄii)をレポートにまとめる。	総括的評価課題と探究テーマとの関係 総括的評価課題では，言語が通じない状況で感情を表現するために，音色をコミュニケーションの方法として用いる。その音色がどのような感情を含んでいるのかを分析し，解釈することで受け手と効果的なコミュニケーションをとれるように工夫をする。 このような，音色による感情表現を分析し、議論を重ね、円滑なコミュニケーションをはかるツールとして、根拠を持った音を創作し、評価する課題を通して，「感情の表現方法の分析と解釈の議論を通して、受け手との効果的なコミュニケーションを生みだす可能性がある」ことを生徒は理解する。

学習へのアプローチ (ATL)

［思考―批判的思考スキル］

・議論を形成するために関連する情報を集め、整理する。

・合理的な結論や一般論を導き出す

①批判的思考スキルの(議論を形成するために関連する情報を集め、整理する)スキルを使用して、感情の表現方法の分析と解釈の議論を行う。

②批判的思考スキルの(合理的な結論や一般論を導き出す)スキルを使用して、音の分析に必要な、音楽的な要素を用いて、その根拠となる要素を特定させる。

［コミュニケーションーコミュニケーションスキル］

・言葉によらないコミュニケーションの方法を解釈し、効果的に用いる。

・意味のあるフィードバックを与え、受け取る。

意味のあるフィードバックを与え、また受け取ることによって、言葉によらないコミュニケーションの方法(音の感情表現方法)を解釈する。そして、その方法を効果的に用いた作品を制作する。

Action 行動: 探究を通じた学習と指導

内容	学習プロセス		
	学習経験と指導方法	形成的評価	差異化した指導
●１～３時間目 <u>音の分析</u> 音の分析に必要な、音楽的な要素を用いて合理的な結論や一般論を導き出す。	学習内容（１）(３時間) 事実的問い： コミュニケーションとは何か。 コミュニケーションとしての音(音楽)を形作る要素は何か。 ①音の三要素について考察する 音の高さ、音の強さ、音色が融合して音が生み出されることや、音は人間の耳を通じて、最終、どのように感じるのかということに関しては脳が判断するということについて考える。 ②事前アンケートの集計結果から考察する 事前に生徒にとった「学校生活の中で自分自身が発している、生み出している音」におけるアンケート結果から日常の中にたくさんの音が存在していることや音の価値について考える ③音を作る→音を分析する 身の回りにある１つの素材＋自分自身＝音を作る。音の三要素に基づいて、個人で音を作る。その作った音をお互い聞き合って、自分自身の新たな発見につなげる。 ④自分にとっての快適な音・不快な音を作る。	(毎時間行うこと) ・個人で作った音の動画をロイロノートに提出させる。 ・ロイロノートにワークシートを提出させる。 ・グループ内で相互評価を行う。	・音色の選択肢を与え、一緒に特定する。

	自分が作った音から音の三要素を基に、音の高さ、音の強さを変化させて自分にとっての快適な音・不快な音を作る。 ⑤グループ内で相互評価を行う お互いの快適な音・不快な音を聞き合って、聴き手はどのように感じたのか、フィードバックを行う。そして、音が人に与える影響力や、音の価値について考察する。 ⑥本ユニットの説明 ⑦これらの作成を通じて，生徒は，意味のあるフィードバックを与え、また受け取ることによって、言葉によらないコミュニケーションの方法(音の感情表現方法)を解釈する。そして、その方法を効果的に用いた作品を制作する。（ATL category: Communication, ATL skill cluster: Communication skill) また，批判的思考スキルの(議論を形成するために関連する情報を集め、整理する)スキルを使用して、感情の表現方法の分析と解釈の議論を行う。(ATL category: Thinking, ATL skill cluster: Critical thinking skills)		
●４～６時間目 <u>分析と実践・議論</u> 分析によって関連する情報を集め、整理し、作品に反映させる。 作品のブラッシュアップのために、互いに意味のあるフィードバックを与え、また受け取り、作品を完成させる。	学習内容（２）(３時間) 概念的問い：感情が伴った音色には、どのような**コミュニケーション**としての表現があるのか。 ①２つの対照的な感情(ポジティブ・ネガティブベース)をテーマに、根拠に基づいた音色を表現するための音素材を検討する。 ［条件］	(毎時間行うこと) ・グループ内で相互評価を行う。 ・班ごとにロイロノートに動画を提出する。その時に、カードを一緒に紐づけて「進捗状況・疑問点・困っているこ	・活発な学習活動が機能するようにグルーピングする

	２つの対照的な感情を表現するにあたり、同じ音素材を用いて音色を工夫させる。 ②２つの対照的な感情(ポジティブ・ネガティブベース)をテーマに、根拠に基づいた音色をグループで作成する。 ［条件］構成の要素を用いること ・音の奏で方　反復・対照・変化 どれか１つは必ず使うこと。 ・音の重ね方 ユニゾン・カノン風・音を重ねる⇔音を減らす どれか１つは必ず使うこと。 ③グループ内で音色を聴きあい、議論を経て作品(10 秒～15 秒)を完成させる。 ［条件１］ よりリアリティーなシチュエーションを表現するために音の三要素に基づいて、音の高さ、音の強さの変化を表現する気持ちと関連付けて根拠を持って作成すること。 ［条件２］ １０秒～１５秒の作品の中で、クライマックスになる部分を決めて、まとまりのある作品になるように工夫すること。 ④これらの活動を通して生徒は，批判的思考スキルの(合理的な結論や一般論を導き出す)スキルを使用して、音の分析に必要な、音楽的な要素を用いて、その根拠となる要素を特定させる。(ATL category: Thinking, ATL skill cluster: Critical thinking skills)	と・その他」を書いて提出させる。	・レポートを書くためのたたき台を準備する。 ・手書きとタブレットの選択

●７時間目(本時) 発表と相互評価・フィードバック 意味のあるフィードバックを与え、また受け取ることによって、言葉によらないコミュニケーションの方法(音の感情表現方法)を解釈する ●８～９時間目 振り返り・総括的評価課題作成	学習内容（３）(１時間) 議論的な問い：感情を，音を通して表現することで，どの程度受け手とコミュニケーションを図ることができるのか。 ①グループごとの作品を発表する。周囲の生徒は、そこに込められた感情を推察する。 ②各グループに、作品から感じ取った感情とその根拠を共有する。 ③フィードバックをもとに、自分たちが伝えたかった感情に対して受け手はどのように受け止めたのか。言葉によらないコミュニケーション方法(音色による感情表現)について班で意見交流をして発表内容を要約する。 ④これらの活動を通して，生徒は意味のあるフィードバックを与え、また受け取ることによって、言葉によらないコミュニケーションの方法(音の感情表現方法)を解釈する。(ATL category: Communication, ATL skill cluster: Communication skills) 学習内容（４）(２時間) 議論的な問い：音の分析を通して，どの程度受け手がその感情を解釈することができるのか。 ①フィードバックを元に、より効果的なコミュニケーションとしての音の表現とは何かを模索する。(個人作業) ②最終レポートの作成(個人作業) 文字数は、１000～１500 字とする。 完成動画と共に提出		

	③これらの活動を通して，生徒は言葉によらないコミュニケーションの方法(音の感情表現方法)を解釈する。そして、その方法を効果的に用いた作品を制作する。(ATL category: Communication, ATL skill cluster: Communication skills)		

リソース
・中等教育プログラム　MYP：原則から実践へ ・中等教育プログラム(MYP)「芸術」指導の手引き ・中学校学習指導要領(平成２９年告示)解説　音楽編　文部科学省

Reflection 振り返り: 探究の計画と過程、影響を考える

単元の指導前	単元の指導中	単元の指導後
日常生活において，私たちは何気なく音を発している。その音を通じて，私たちは自らの感情を伝えることがある。世界には，言語が通じなくともコミュニケーションをとる必要性のある場面が存在する。そこで，その日常生活の中で自分自身が何気に発している音に意識を向けさせ音の存在価値について考えさせることで，「コミュニケーションができる人」の学習者像を育成したい。		